

氏 名	なか がわ のぶ とし 中 河 伸 俊
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	論文博第 453 号
学位授与の日付	平成 15 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	社会問題の構築主義的探究 ——理論と応用——

論文調査委員 (主査) 教授 寶 月 誠 教授 松 田 素 二 教授 永 井 和

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1970年代後半にその基本的な視点と研究プログラムが確立されたあと、いっぽうで経験的研究を蓄積しつつ、とりわけ1980年代中葉以降方法論的自省の波に洗われることになった社会問題研究の領域における構築主義アプローチを検討し再構成するとともに、それを経験的探究に応用してその可能性の豊かさを示そうとするものである。

本論文は、「理論編」、「応用研究編」、「結論」の三部構成をとる。第Ⅰ部では、構築主義的な社会問題研究のアウトラインが提示され、さらにその前提となる方法論的な課題の検討や、その視点の社会問題以外の領域への応用の試みが行なわれている。第Ⅱ部では、執筆者自身の経験的研究が提示され、そして第Ⅲ部では、以上のような理論的考察と経験的研究を踏まえて、このアプローチの新たな展開へ向けて研究方針が再確認される。以下、各章の概要を、順を追って記述する。

[第Ⅰ部]

第1章の「社会問題とは何か」では、まず、『社会問題の構築』でのスペクターとキツセの議論を整理し明確化する形で、社会問題という研究対象の同定にあたって使われてきた機能および規範を基準にした社会問題の定義がいずれも調査可能性という点で困難を孕み健全な経験的研究の出発点にはならないことが示され、続いて、社会問題活動という新しいトピックへの研究対象の転換が提案される。そして、「クレイム申し立て」や「社会問題(状態)のカテゴリー」といったキイ概念の提示を通じてこの新しいアプローチの輪郭が描かれたあと、その前提には、社会的事象をポジティヴィズムの因果モデル(原因論)ではなく、エスノメソドロジー／会話分析と共通の継起モデル(言語行為の連鎖モデル)の立場から捉えるという視点の選択があることが明らかにされる。このような形でスペクターとキツセの議論を整理し、補正を加えて明確化したあと、章末では、こうした新しいプログラムに対して従来の社会問題論の側から出された、問題の「実態」や「声なき声」、改良への道徳的責務といった点をめぐる批判への、構築主義的アプローチからの回答が示される。

第2章の「社会問題研究と公式統計」では、逸脱研究の分野で1960年代から70年代にかけて展開された公式統計論争の再検討を通じて、メンバーのカテゴリー化や定式化の活動を研究対象にする構築主義的な社会問題研究が、計量研究や折衷主義的なトライアングレーションの発想と袂を分かつたねばならない理由が示される。社会問題への構築主義アプローチは、ある意味では、逸脱研究におけるラベリング・アプローチの先鋭的な部分を純化したものだといえる。そして、後者の方法論的にもっとも先鋭的な議論の一つが、逸脱研究における公式統計の使用に対するクリティークだった。この論争は結局、ラベリング論者のクリティークを主に暗数と信頼の問題と捉え、測定法の改善によって対応しようとした実証主義者と、それをカテゴリー化をめぐる問題、つまり実証主義プログラムの手順の妥当性の問題として概念化する現象学派やエスノメソドロジストの主張とのすれ違いに終始した。後者の視点から導き出された「統計を作り出す作業」のエスノグラフィーの重要性は、前者の視点からは無視されたが、それこそが構築主義的な社会問題研究の一つのプロトタイプなのだと、本章は主張する。

第3章の「方法論のジャングルを越えて」は、いわゆるポストモダン状況を体現するかのように多元化した質的研究プロ

グラムの選択肢の中に、「エスノメソドロジーの知見を踏まえた構築主義」のプログラムを位置づける試みである。この章の前半では、主にグブリアムとホルスタインの議論に拠りながら、自然主義、構築主義（エスノメソドロジー）、感情主義（生きられた経験アプローチ）、ポストモダニズムという四つのタイプの「質的研究の言語」が同定される。因果モデル的な why の問いを捨て、自然主義の what の問いと構築主義の how の問いとの間を、後者（つまりはメンバーによる相互行為的達成の方法の探究）に重心を置きつつ往還するというのが、本論文で提唱される「エスノメソドロジーの知見を踏まえた構築主義」のスタンスであり、したがって、個人の内的経験やポストモダンのリフレキシヴィティに焦点を合わせる質的研究のアプローチは、このスタンスからみれば余分なノイズとなる。

第4章の「社会構築主義と感情の社会学」では、1980年代に感情の社会学の分野で行なわれた感情の社会性についての論争をレビューし、ラベリング・パースペクティブから社会問題の構築主義へと展開の中で培われた知見が、他分野での構築主義をめぐる議論に応用可能であることを明らかにする。この論争は、感情の生理的基礎をめぐる、ケンパーら「ポジティヴィスト」とショットやホクシールドらの「構築主義者」の間で交わされたものだが、シャクター＝シンガー実験をその裏づけとして示す後者は、結局十二分に言語論的転回の成果に依拠しておらず、「生理＋言語行為（感情の語彙の使用）」という二重底の論理構成をとることになっている。しかし、社会問題研究におけるクレイム申し立てアプローチが示すように、社会の状態であれ個人の内面の感情であれ、言語行為の介在を抜きにした事象（what）の捕捉は不可能であり、したがって、感情研究のポジティヴィストも構築主義者も同じ理由から、経験的に調査可能なプログラムを描くことはできない。結局、動機の話論のエスノメソドロジー（あるいは言語ゲーム論）の方向への徹底以外に、社会学的な感情研究の進む道はありえないというのが、本章の結論である。

[第Ⅱ部]

第Ⅱ部の応用研究編では、「青少年健全育成」と「美術作品の検閲」という二つの社会問題活動の過程についての、執筆者自身の経験的研究の成果が示される。

第5章の「追放運動から論争へ」では、1990年代初頭に展開された「有害マンガ」をめぐる社会問題活動を、主に経時的に概観する。文書資料をインタビュー・参与観察によるデータで補足する形で、四つの時期区分の枠に沿って、「追放運動」型（単一ディスコース型）の問題活動から複数のクレイムが対抗する「論争」型の問題活動へ、そしてさらにアリーナとクレイムの焦点を変えての比較的閉じたネゴシエーション（交渉）へという問題過程の展開が記述され、さらに、ボルナーの世俗的推論をめぐる議論を参照しながら、「青少年に有害なマンガ」という事象（what）を制度的・常識的に「存在する」ようにさせる方法についての考察が行なわれる。

第6章の「『有害マンガ』問題とレトリック分析」では、前章と同じ「有害マンガ」問題にレトリック分析という、社会問題の構築主義で近年広く使われるようになった手法を適用する。従来の社会問題のレトリック分析をレビューしたのち、そのうちのイバラとキツセのレトリック分析を「有害マンガ」問題のクレイム申し立てに応用して、レトリックのイデオロムと対抗レトリックがリストアップされ、さらに、それらを使って、方法論的難点が明らかになったスペクターとキツセの自然史モデルに替わる、問題過程の記述のための継起的モデルを組み立てる試みが行われる。

第7章の「社会問題の三者関係型過程と逸脱表現の構築」は、地方公立美術館での「天皇版画」をめぐる社会問題過程の事例研究である。問題過程を経時的に記述したあと、そこに見られる公共機関を中に置いた三者関係型の相互作用パタンの特徴や、クレイムメイカーとクレイムとアリーナの相互反映的構成が考察され、さらに後半では、問題活動の焦点になった「美術作品」が層をなしつつ対抗する定義活動の達成物であることが示される。

[第Ⅲ部]

本論文の「結論」に当たる第8章の「トラブルのエスノグラフィーと社会問題のワーク」では、最初に社会問題の構築主義的研究の沿革を詳しく振り返ったのち、構築主義者の間に混乱を招きたいわゆるOG（存在論的ゲリマンダーリング）論争を再訪して吟味する。ウールガーとポーラッチによるOG批判は、科学社会学におけるポストモダン系統の議論を社会問題研究に移入したものだったが、そこで提示された「アポリア」は疑似問題にすぎないというのが、ここでの主張である。ウールガーらはOG 1（社会問題だとされる「状態」の括弧入れという構築主義的な社会問題研究の公準違反）とOG 2（あらゆる「状態」の括弧入れという反実在論の立場の違反）というOGの二つのレベルを混同している。社会学的議論一

般が孕む困難として提示されたOG 2は、サールも指摘するようにコミュニケーションというものの本性からして回避不能だが（あえてそれを回避しようとする方法論的試みは結局袋小路に陥ることになる）、OG 1のほうは回避できる。大略以上のようにOG批判に論駁したあと、本章の後半では、ラベリング論の伝統と社会問題の構築主義をつなぐトラブルの研究や社会問題のワーク研究の構想と研究例を紹介し、そうしたエスノグラフィックな研究が、構築主義プログラムの足場を固めるという意味で重要だと指摘する。

末尾の『『翻訳』と法的現実のモザイク』は、事例記述の一部が本論と重複するため補章（付録）としたが、ここでは、社会問題の構築主義的研究を法社会学の文脈内に位置づけながら、7章と同じ「天皇版画」問題を素材に、トラブルや社会問題をめぐるアリーナ間でのクレイムの「翻訳」（あるいは「共約可能性」の相互行為的達成）という、新たな探究課題の提起が行なわれている。

論文審査の結果の要旨

「社会問題」の研究では、これまでその原因や社会的対応について数多くのことが論じられてきたが、そもそも「社会問題」とは何か、ということが正面から論じられることは少なかった。特定の具体的な「社会問題」を取り上げ、厳密な実証主義的方法で原因等の研究を行うのが通常の研究スタイルとなっており、「社会問題」の定義は自明視されているか、さもないければ機能主義的な観点から社会に有害な結果（逆機能）をもたらすものを「社会問題」と定義することで済まされてきた。こうした趨勢に真正面から挑戦したのが、アメリカの社会学者マルコム・スペクターとジョン・キツセの二人であった。彼らは「社会問題」は自明なものではなくて、社会的に構築されるものであると主張する。1970年代の後半になされた彼らの問題提起は、「社会問題」や逸脱行動の研究者の間で多くの反響を呼び、「社会問題」の構築主義論争を引き起こすことになる。

論者はスペクターとキツセの視点をいち早く日本に紹介しただけでなく、「アメリカ社会学会」や「社会問題学会」において自らも論争に加わり、内外での構築主義論争の一翼を担ってきた。この20年間に発表された「社会問題」の構築主義に関する文献の数は200をくだらないが、論者はこれらをくまなく調べ、代表的な文献の翻訳や編集を進め、さらに構築主義の立場に立つ日本の研究者たちを組織して編著を出版し、この分野を常にリードしてきた。本論文は論者のこうした意欲的な活動の成果を踏まえて、「社会問題」の定義をめぐる理論的視点を体系化し、さらに二つの事例研究を通じて自らの理論を一層深めようとしたものである。

構築主義のアプローチは、「社会問題」とされる「状態」の研究から、「問題の定義活動」へと研究の対象を転換することを意味するが、批判者からは構築主義者が人々の「定義」を研究対象とするといいながら、密かに「状態」についての一定の想定を導入しているのではないかという指摘がなされ、いわゆる構築主義論争がまきおこった。構築主義を標榜する多くの研究では、ある「状態」とそれを「社会問題」として定義することが可変的であること、つまり定義が時とともに変わってきたことや、同時期に同じ事柄について異なった複数の定義が観察できることが示される。続いて、こうした定義の可変性は社会的な「勢力」や「世界観」や「社会構造」といった歴史-社会的な要因によって説明される。となると「社会問題」の構築は、人々の「定義」の仕方を左右するとされた「状態」によって説明されることになり、構築主義の掲げた「公準」に反することになる。

この論争は二つの立場を生み出した。「厳格派」と呼ばれる立場は「状態」の密輸入を避けるために、「社会問題」についての人々の言説分析に研究を限定しようとする。他の「コンテクスト派」と呼ばれる立場は、単に言説分析に逃げ込むのではなく、「定義」の背後にある「状態」を想定することが、実際の「社会問題」の構築を理解する上での有益であると主張する。論者はこの二つの立場と異なる構築主義のアプローチを構想する。それは「社会問題のワーク」（ないしは「エスノメソドロジー」の知見を踏まえた構築主義）と論者が呼ぶ方法で、人々が相互作用や活動をおこなっている実際の社会状況において、人々のやり取りの中での解釈や記述の実践を通じて「社会問題」は構築されていくものであることを明らかにしようとするものである。この立場は単に「社会問題」構築を言説レベルにだけ限定せず、また安易に「状態」を想定することなく、人々の具体的・現実的な構築活動の文脈の中で展開された言説や記録をデータにし、「社会問題」をめぐる活動を記述し分析したいという研究者としての関心から、構築過程をリアルに解き明かそうとするものである。

こうしたアプローチに基づいて、論者は「有害マンガ」の追放運動と地方の公立美術館で購入された「天皇版画」をめぐる論争についての事例研究を行っている。前者では「社会問題」として「有害マンガ」なるカテゴリーが構築されていく過程を「前史」（1989年-1990年3月）、「追放運動期」（1990年7月-1991年3月）、「論争・対立期」（1991年4月-1992年3月）、「交渉期」（1992年4月-1992年12月）、「その後」（1993年）にわけて、それぞれの段階で主題となった論点、論争の関係者たち、関係者たちが用いるレトリックや対抗レトリックを丹念に分析し、記述している。さらに、後者の研究では、1986年6月に富山県議会の一部の議員からなされた美術作品購入への「クレーム」を発端とする出来事を、参与観察しながら2000年10月まで、約14年間にわたってその経緯を辿っている。これらの研究で明らかにされた点は、構築過程で主役となる関係者たちが時間の経過とともに交代し、互いに影響を与え合うなかで彼らの主張や論点もともに変化していくのもであるということである。「問題」構築過程は多様で柔軟な生き物として捉えられている。従来は「問題」構築過程を一定のパターンを辿る「自然史モデル」で概念化することが多かったが、論者はそれと異なる具体的な事例を示した点で、興味深い研究である。

論者は第二章で公式統計を用いた「社会問題」研究の限界を鋭く指摘し、構築主義のアプローチとしては、二つの事例研究を踏まえて、参与観察が有効性をもつことを示唆している。もちろん、参与観察で苦勞した論者は手放して参与観察を礼賛しているわけではなく、調査者と当事者の役割の微妙な緊張関係や観察の限界についても詳しく述べており、調査方法論としても興味深い内容である。

以上のように、本論文は構築主義論争の批判的検討と自らの経験的研究を通じて、「社会問題」の研究に新しい視点を切り開いたものとして高く評価できる。しかし、本論文に弱点がないわけではない。論者は「社会問題」の構築主義にこだわるあまり、「状態」の変数を持ち込むことにはなはだ禁欲的であるが、制度や規範をはじめとする社会構造や文化的要素を回避するだけでは、どこまで「社会問題」を説明できるのか疑問である。事例研究において確かに構築過程は丁寧に記述されているが、そこに解釈の「面白さ」や「意外性」に欠けるものがあるのは、やはり社会構造を回避しているためではないだろうか。しかし、これらの弱点は論者も自覚している点であり、決して本論文の全体としての成果を大きく損なうものではなく、論者の今後の研究に期待すべきところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2003年5月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。